

平成26年度 病害虫発生予報 第7号

平成26年10月24日
栃木県農業環境指導センター

〇イチゴの害虫、トマト葉かび病の発生増加に注意しましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量： **やや少ない**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率60%、発生株率76%）。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、日照時間が多い見込み。(－)
- (3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・多発してからの防除は難しいため、現在発生が見られない場合でも予防を主体にアフエットフロアブルやタフパール等を散布する。
・発生が見られたらトリフミン水和剤やガッテン乳剤等を散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並（平年比：ほ場率88%、発生株率101%）。(±)
・主要薬剤の殺虫効果が低下しており、密度抑制が困難である。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや適している。(±)
- (3) 対策 ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・発生が見られたら葉裏のハダニ類を洗い流すように気門封鎖剤を約5日間隔で複数回散布する。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
・葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。
- (4) 備考 ・天敵を導入する場合、導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、定期的気門封鎖剤などを散布し、導入前にハダニ類の増殖を抑制しておく。
・[「園芸作物に発生したナミハダニの薬剤感受性検定結果」](#)を当センターHPに掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量： **多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い（平年比：ほ場率150%、発生株率178%）。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(＋)
- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内の除草を行う。
・低密度のうちにカスケード乳剤[ミクキアザミウマ]かアタブロン乳剤[ミクキアザミウマ]等のIGR剤を散布する。
・花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、ディアナSC等を散布する。
- (4) 備考 ・開花が早い作型では、秋期のアザミウマ類の発生が多い傾向にあるので、発生に注意する。
・[植物防疫ニュースNo.16（いちご：アザミウマ類）](#)、[「園芸作物と花きに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果（続報）」](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・現在の発生量は多い（平年比：ほ場率535%、発生株率200%）。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや不適である。(－)
- (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・予防を主体にベルコートフロアブルやアフエットフロアブル等を散布する。
・発生が見られたらトリフミン水和剤やファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する（[平成26年度病害虫発生予察特殊報第1号参照](#)）。

5 野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 10月第2半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数がやや多い。(+)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対 策 ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
・ ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。
・ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュースNo.12 \(大豆・野菜類・花き類：ハスモンヨトウ・オオタバコガ\)](#) をホームページに掲載中。

6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	きゅうり	べと病	やや多	多
	コナジラミ類	平年並	やや多			アザミウマ類	平年並
トマト	灰色かび病	少	少	にら	さび病	平年並	やや少
	疫病	平年並	やや少	野菜類	タバコガ類	やや多	多
	コナジラミ類	少	やや少	きく	ハダニ類	多	多
きゅうり	うどんこ病	平年並	平年並		アザミウマ類	多	多

秋冬の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯病、イネ黄萎病

・ 両病害が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は媒介虫の増殖源とウイルスやファイトプラズマの伝染源となります。早期の丁寧な耕起により次年産の本病拡大を防ぎましょう。

○トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

・ 雑草はタバココナジラミの増殖源となるため、施設内外の除草を徹底しましょう。
・ 罹病株は伝染源となるので見つけしだい抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビニル袋などで密閉し、枯死させてから処分しましょう。

※[植防ニュース \(速報No. 14\) 「タバココナジラミ防除を徹底し、トマト黄化葉巻病を防ぎましょう！」](#)参照。

○ナシ黒星病 (秋季防除)

・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の伝染源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

※[植防ニュース \(速報No. 15\) 「ナシ黒星病の秋季防除を徹底しましょう！」](#)参照。

○農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

☆ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。

☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報 (予報期間10月18日から11月17日 10月16日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わってでしょう。平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い (少ない) 確率	平年並の確率	高い (多い) 確率
○気 温	20%	30%	50%
○降水量	30%	40%	30%
○日照時間	30%	30%	40%

○農薬の使用方法が変わります

農薬の残留基準値を設定する際に新たな評価項目が導入されたことに伴い、今後使用できなくなる農薬及び使用方法が変更される農薬があります。

農薬をラベルに記載された使用方法で使用した場合、今後改めて設定される農作物の残留基準値を超過する恐れがあるので、注意が必要です。

詳しくは農業環境指導センターのHP (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) をご覧ください。

詳細は農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問い合わせください。
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](#)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。